

# 紀南病院 研修医通信第50号

2014年9・10・11月号(平成26年11月27日発行)



紀南病院を中心とした、紀南地域での研修はいままでの初期研修では経験できないことでいっぱいでした。地域をささえている病院で、若い先生方があまり後ろ盾のない中で責任をもって診療されている姿はとても刺激になりました。診療所にもいろいろと行かせていただいたことで、医療というものが決して中核病院のみで成り立っているものではないことに気づかせていただきました。特に診療所では本当にそれぞれの患者さんに対してオーダーメイドの医療がされており、市中の病院ではついつい忘れてしまいがちなことを思いださせてくれました。今後どこで勤めていくかはわかりませんが、どのような場面でも常にそのことを大切に精進していきたいです。また、紀南の自然はほんとうにすばらしいです。海岸沿いに南北に走る道を、浜風に吹かれながら自転車で駆け抜ければ、日ごろのストレスなんか吹き飛んでしまいました。堺に戻ってくるとより一層、紀南の自然のありがたみがわかります。このようなすばらしい地域医療研修を設定していただいて、本当にありがとうございます。今後も堺病院をよろしくお願ひします。

市立堺病院 十倉健男

もともと群馬県生まれなので、田舎暮らしは大丈夫だろうと思ってやってきましたが、意外と大変でした。ただ、この大部分は車がないために起きた問題だと思うので、今後また田舎に住む時のために運転の練習をしよう決めました。でも、交通の便の悪さを除けばやはり田舎の良いなと思える生活を十二分に経験できました。自然に囲まれ、部屋に居ながら秋の虫の音が聞こえました。海が近くて、病院の窓から色や波の変化を日々愉しむことができました。年中みかんのとれる町、というだけあって道端のあちこちで実をつける木々もちょっぴり安らかな気持ちにさせてくれました。美味しいものも沢山ありました(主に歩行可能圏内のスーパーで入手)。研修としては自分の限界を知り、その中でベストのパフォーマンスをすることの大切さを学びました。限られた時間、情報、医療資源の中で行い得る全ての検査や治療ができる場合ばかりではありません。自分にできること、別の人にできること、別の病院でできることを考慮した上で、患者さんに適切な医療を提供していくこと、そして相互に連携・助け合うことを学びました。一か月という短い期間でしたが、ありがとうございました。



東京大学医学部附属病院 丹羽良子



目の前に見えるは太平洋。「鶴瓶の家族に乾杯」にひょっこり出てきそうな、そんな町にお邪魔して始まった私の地域医療研修。医療も時間の流れ方も、それを決めるのは医療者ではなく“地域”なんだと感じた研修初日から、哀しいかな、早くも一ヶ月が経ちました。海外留学をして日本を知ったときのように、三重に来て大阪を知り、紀南病院に来て堺病院を知りました。医師が少ないこの地域では、患者さんにとって若手もベテランも関係なく、出逢ったその日から、「私があなたの主治医」なんだということ。セカンドオピニオンなんて勿論ないし、自分が施す医療がその患者の全てになる怖さ。逆を言えば自分の頑張り次第で如何ようにも変えられるという現実。この地域を背負って懸命に働く紀南病院の先生方に出逢えたことは一生の宝だし、地域を愛し自分の生き方を全うするこの地域の方々に出会えたことはこの上ない”仕合せ”です。なんだか、私自身も、「もっと深く、もっと濃く、」生きてみようと思いました。この一ヶ月間お逢いしたすべての方々から感謝致します。ありがとうございました。

市立堺病院 中井りつこ

おはようございます！！1ヶ月とうい短い期間でしたが、大変お世話になりました。ありがとうございました！大学病院では経験できないことばかりの毎日でした。日々の生活から言えば、毎日みかんが食べれること。笑。建物が低く空が大きく切り取られ星がとてもきれいなこと。病院から海をバックに日の出が見れること。日の出をちゃんと見るなんて正月か富士山を登った時くらいです。病院ではとにかく若い医師がパワフルで感動しました。先生方同士の垣根が低く、困ったことがあればすぐに相談され、とても素敵な環境だと思いました。また感染対策室・細菌検査室の方たちともお話をする機会を頂きましたが、ここでもまた距離の近さに驚きです。コーヒー大変おいしかったです。笑。一方で医師として自分の甘さを痛感した毎日でした。しかし非常に刺激的で大変だと思うことはあったけれど、つらいと思うことは一度もありませんでした。これからもがんばります！！ありがとうございました。

東京大学医学部附属病院 井上 明葉

